

甲南女子大学蔵『源氏小鏡』解題と翻刻（中）

米田明美
中葉芳子

本稿は、甲南女子大学蔵「光源氏一部連歌寄合之事」（全三冊）の翻刻と解題を記す。

該本は、本大学図書館に残された売買記録によると、昭和四十八（一九七三）年頃に古書店から購入されたもので、昭和三十（一九五五）年三月に古典文庫により『良基連歌論集 三』（岡見正雄）として翻刻されている本の原本である。古典文庫には、書写年代も含め詳しい書誌なども記されておらず、また朱点・割注の取り扱いや翻刻誤りもある。古典文庫に掲載されてから長く所在不明になっていた故、諸本分類における該本の取り扱いも困難であったようだが、この度の調査により書写年代や伝来を含め、新たに判明した点もあるのでここに詳しく紹介したい。

今回は、該本の伝来と前号からの続きの翻刻（二冊目 明石・藤裏葉巻）を示す。

一、伝 来

本書は、一冊目墨付き一丁表右下と三冊目の五三丁裏に、**燕安**という蔵書印が押されている。燕安とは「燕安居」と号した小笹喜三（おざさきぎさう）のことであろう。小笹は、『平安人物史短冊集影』（一九七三年 思文閣）などの著書があり南画や書に造詣が深く、日本文化財鑑定会会長、陽明文庫の前主事などを務めた人物である。本書は、小笹喜三旧蔵本に相当する。故に「源氏小鏡」の伝本分類で、小笹喜三本と古典文庫本と両者の名前が挙がっているが、実は同一伝本であることが

判明した。該本には付属文書が二葉付されている。一葉は『源氏小鏡』に関する研究調査メモのようなものであるが、もう一葉は本書の来歴等を示す小笹喜三自筆の文書で、研究史の一端を示すものと考えられるので、ここにその内容を紹介したい。用紙は市販のA4（四〇〇字詰）原稿用紙二枚に書かれ、推敲訂正の跡甚だしく判読し難い箇所もあるが、できるだけ解読してみたい。

「古寫本『源氏小鏡』附言

この三卷本はもとより標題^{イタ}あらずして開卷初行に「ひかるけんしいちふ・れんかよりあひの事」と見ゆ。これなんいはゆる「源氏小鏡」のいと古きさまなりかし、今これを万の源流の流布本と對照するに、大いにたがへり、引歌及び假名遣の異同いちじるしく、部立（紅梅の次二）盛行以前にさかのぼりて、さればにや、書写の年代も足利氏の中期を下らざるいと珍らかなる貴重本とぞ謂つべし。この本の成立は、青表紙本の系して、河内本系などの古き系統のに拠れるもの。

予これを夙に獲て永らく秘めおけりしを、昭和十五六年の交なりしかとおぼゆ、京都大学国文学研究室に望まれて寫影のために一とたび貸し出したりしことのありしを、そののち廿五年の秋、これも研究のためにと望まれて、知友・岡見正雄氏のもとに久しく貸し託しおきたりしを、今年にいたり、ほとんど忘却のうちに、これを返し戻されつるなり、本の体裁の見違へるばかりやつれたるを見て、驚き且つ、これが内容の、いかばかり研究検討を加へられつらむかと、おぼろげながら想いめぐらしつ、も、とにかくなん、筐をつくらせてこの事由をした、めおくものなり。

乾郊なる燕安居にて篠喜三、時二昭和卅七年八月の上旬。

○宇治十帖のうち 引歌の異同例

やどり木の巻

流布本

。やとり木を思ひしらすはこのものとたひねもいかにさひしからまし
。しもにあ^へえずかれにしその、きくなれとのこりのいろは^{あせすもあるかな}かわらざりけり
浮舟の巻

流布本（寛文板小本）中間二欠文多く見ゆ

。うちはしのなかきちきりはたえせしをあやふむかたにこゝろさはく
。なみこゆるころともしらて^すあ^すのまつつらんとのみおもひけるかな

巻末

。い上五十四てう、此ほかすもり一卷、さか二巻、しくわん二巻、うばそく二巻、
そうつから六十てうなり。」

三、翻刻（明石・藤裏葉）

翻刻に当たっては、

- ・朱筆（句読点・濁点・合点）は、書写当初には無かったものと考えこれを省いた。
- ・行数および改行については、忠実に翻刻した。
- ・ルビが付されている場合、ルビはそのまま付けた。
- ・小文字の割注については《》で示した。
- ・ミセケチ・重ね書き・補入については、

ミセケチ あい

重ね書き □（下の字が判読不可の場合は□とする）

補入 補入記号のない場合 あい

補入記号のある場合 あい

「〔紙〕とある場合は、小紙片に字を書き貼り付けてあることを示す。

・虫喰いにより判読不可の場合は、□□とし右に「虫喰」と傍記した。

・丁の終わりに「」を付して丁数を入れた。」一オ

・寄合語が列挙されている箇所は、寄合語と寄合語の間に空白が入れられている箇所と、入れられていない箇所があるが、それも当該本の特徴と考えてそのままにした。但し、どちらとも判断し難い箇所は、空白を置くことにした。

第十あかし 《あかしかた、くくあなあた夜の 月けのこむまのまきのとくちは》

これも此まきにけんしすまよりあかしへうらつたひ
し給へはあかしのまきといふへしかの十三日のあかつき
におきのかたをゆめさめてのち御らんしやり
ければちいさき舟にのりてはりまのこくしこ
れをあかしの入道といふ也かの人のもとよりあんなひ
申てけんしをよひたてまつりて御むかへに舟を
たてまつる此きみゆめうつ、をおほしめし合て
さうなくかのうらゑうつり給ふ入道よろこひかしこ
まりき事かきりなしいつきかしつきたてまつるそ
のことはに むかひ舟 ふなて おいかせ う・つたい
うらよりおち これらはすまよりあかしへわたり給ふ
ときのこととはかくて宮この御すまいにもさまく
たちまさりてか、やくほととのせんすいにていしい
け水やりみつめもおとろくはかりなりふるさとの
いけみつにおもかけ見ゆるなといふ事もありこれは
三月の事也程なく四月にもなりければころもかへの御
しやうそく御ちやうのかたひらかへのわさまにてあらた
めてまはゆきほともてなしかしつきたてまつる此人
道いみしくかしつくむすめ一人もちたりわかむら
さきのまきにわらはやみのおりきた山にて人、のかた
り出しむすめなりつねに思ひかしつきてなへてなら
すかしつきよのつねのむこをはとらしとおもふ所にか
のひかるけんしすまのうらにしつみ給ふをき、てい

「一オ

「一ウ

「二オ

かにしてかこゝもとにうつしたてまつりむこにとり
たてまつらんとおもふをやすみよしのかみの御あわれと
おほしめしけんとし月すみよしにいのりきこえきす

まにてけんしの御らんしけんゆめをおなしやうに

かの入道も見てとりあへす御むかへをまいらせけ

りされ共いかにしてかいひ出すへきとつゐてをまち

けるもいとほるけき心ちせしあるよけんしみやこおほしめし

二てうのいんのむらさきの上よりはしめてかすゝおほしめし

出し物あわれになれはことをひき給ふにうたうたへ

かねて身つからしやうのことをもちてまいりすゝめたて

まつるすこくひきすさひ給ひてこれは女はうの

ひきたるこそにつかはしけれとの給ひしをことのほの

たよりにていひよりたとへは此むすめはひわにやう

のことなとたくぬなくひきければこのひはことを

きかしたてまつらはやと申出したりしよりけんしも

ゆかしくおほしめしてつねに文とかよふそのことには

くるみいろ こすみうすゝみ かすめしやと

おちこち おかへのやと此ことはあかしに付へし

このおかへのやとは入道のむすめをすませし所もお

やのもとよりちとひかへたてゝおきたりきさてとかく

いひよりてかよわせ給ふまでもかよる給ふに

ある夜みやこをこひしくおほしめして

《あきのよのつきけのこまよ我がこふる
くもひをかけれつかもまも見ん》とよみ給ひしなりさてこ

そ月けのこまといふ事あかしに付く又あかしにくるまといふ

事ありい中となれはくるまなしとおもふへからすにう

たうつくりてもちたることありさてこのむすめみな

月の比よりたゝならすなりたりしを御らんしお

きてけんし八月にみやこゑめし返し給ふ此

「三才

「二ウ

うらには三月よりつきの年の八月までおはします

あかしのふたうらに三とせのわかれといふはこれなりさて

かへりのほり給ふにせんねんみやこのわかれにもお

とらすおほしめして《みやこ出しはるのなこりにおとらめや
としふるうらをわかれぬる秋》

とよみ給ひてなくゝみやこへのほり給ふかのむす

めのこゝろのうちおもひやるへし入道もなこりをお

しみたてまつりてつかまて御おくりにまいりけんしも

かたゝあわれにみすてかたくみやこのわかれにもおと

らすおほしめしてなそや心から物おもふらんと身を

うらみおほしけんさてあかしの上の御はらにひめきみ

出きさせ給ふ松かせのまきに三つにてきやうへ

むかひよせまいらせてむらさきの上の御こになして

とうくふのねうこにまいらせ給ふあかしの中くふとはこの

御事也又あかしにとはすかたりと御うことありこれは

あかしのうゑをうきたひのすまいにもち給へるをい

かにみやこにおもはすにきゝ給はんすらんとおほして

人のくちよりもれぬさきにとおほしてむらさきの

うゑの御もとへ思ひよらぬゆめをこそみて候へゝうらなき

とはすかたりにおもひゆるし給へとの給いて歌に

《しほくともつそなかるゝかりそめの
見るめのあまのすさみなれとも》とよみておくり給いしなりこれを

とはすかたりというなりあかしのことは すま ゆ

めのつけ みてくら おふやしま ふな出して うみ

にますかみ ふるさと あやしきかせ い上あかし

のまきのことはなりといへとすまの事なり あかし

なきさのとまや おこない人 たかしほ あぎのた

のみ いなくら ゑゝろもかへ あわちしま ことのふくろ

せはき所《こをそたつる
あまとみつる》かみのしるへ ひは うらはなれたる

たひころも《うらかな
しき》こゝろのおに かすめしやと 「五ウ

「五才

「四ウ

「四才

あいなたのめ まきのとくち ちかまさるする

第十一 みをつくし 《みをつくしにわのみそきすみよし》
いりゑのたつのおもひこのため

此まきを見をつくしといふ事は 《数ならて何わのこともかひなきに
何身をつくしおもひそめけん》

この歌ゆへなりけんしみやこへめしかへされてほとなく

もとのくらいにあらたまり数のほかのこん大なこんに

なりないしかけ給ふいみしくさかへ給ふほとにすま

にてかみなりおちかゝり又ゆめのさとしもさまゝす

みよしのかみの御ちかいとおほしめして秋の比すみよしへ

まいり給ふかのあかしの御かたもはるあきことにおや

おさなくより出したて、^す□みよしへまいらせはるゝ

みやこよりまいり給ふをしらすあかしよりまいり給ひ

たれはまつ御はらひにくるまたてつゝきていみし

きさまなれはたかまいり給ふにかとやすらひてなにわに

ふねさしとめてとはせ給いければうちのおとゝのま

いり給ふといへはこと人よりははつかしくかすならす身

のほとはとおもひてなにわのはらいはかりにてかへりなんと

「六ウ

するにしのひやかに人しらせたてまつりければ

いの心しりのこれみつ御くるまちかくまいりて申ければ

わひぬれはとくちすさみ給ふ此心わほんかに

わひぬれはいまはたおなし何はなる身をつくしてもあはんとそおもふ

といふ心をの給ひしかは御よふもやとてつねによふ

いしてもち給ひたるつかみしかきふてすゝりをと

り出して御くるまへたてまつるたゝうかみに

「七オ

身をつくしこふるしるしにこゝまでもめぐりあひぬる何わゑのうち

とよみてかのふねにつかはされければみをつくし

といふことにすみよし めくりあふ なにはへなと

いふ事を付へしさて此まきにあかしの上ひめ

きみうみたてまつり給へはきやうより御めのとなど

くたさるそのこといわひのおいさきいか時そともな 五十日也
きかけ うらにてつみ給ふ事也 これらはかのひめきみのうまれ給いししふん
のおりと心へへし

ならひせきや 《せきやとうすきのしたみちわくらはに》
あふさかまてかけきなけきは 「七ウ

此まきをせきやといふ事けんしいし山へまいり給ふにせき

山にてむかしうつせみときこえし人のおとこいよのす

けひたちのこくしになりて下しかかわりてのちきやへ

のほるにせき山にてあひ給ひしかは人しらすむかしの事を

おほし出てしのひてむかしの心しりのこきみをめして

文ありそのことは うみなり せきや しみつ ゆきあふみち みつ しば

ならぬうみ うみなり せきとめかたきなみた そのおりの歌の

ことはなり これらをとり合ていし山又せき山などに付へし 「八オ

《わくらはに行あふみちをたのみしも》
《なをかひなしやしほならぬうみ》
《たえぬしみつと人のみるらん》

けんしはいし山へまいり給ふうつせみはみやこへいれは

ゆくとするとの心也わくらはとはたまゝの心なりこれら

のことはあふさかに付へし あわた山 しけきなけき

すきのした

ならひよもきふ 《よもきふのわけのしくれあまそゝき》
みかさと申せたもとせはくは

このまきをよもきふといふ事わかむらさきのならひに

すへつむ花みめ わろく・はなあかき女ほうのためしすくなく

みにくかりしはひたちのみやの御むすめそかし

けんしあわれみ給ひてしはゝたちよらせ給ひし

かともすまの御かたなどにはおほしめしもかへさせ

給はすされともちゝみやの御あとをかれはてし

と心をたてゝいふかきりなくかすかなる御す

まいにてすみ給いしをすまよりかへり給て

はなちるさとの御かたへさつきはかりにわたり給ふに

さみたれの露ふかくよもきむくらしけきふるき

「八ウ

いゑありこれなんひたちの宮と御ともの人と申けり
「九オ

まこと、おほしめし出、わけ入給ふにしきりに
露しければみかささしかけ・御ともの人む
まの・^{むち}してあまつゆをはらひていらせ給ひてそれ

よりあわれみ給ひてにわのくさ共ひきのけさせて
所／＼つくろはせなとして二三ねんありて二てうのいん
のひかしのたいにうつしてふちしたてまつりし也すへ
て御心かたくしてよろづさし出はみ給ひてかたはら
いたき事おほかりし人なりそのおりの御歌

「九ウ

《たつねても我こそはめみちもなく》
《ふかきよきかものころは》
よもきふにはむねとむちと
かさとあれたるやときつねなと付へし又よもきふには
すゑつむ花といふ事あり心へし此すへつむ花の女はう
めとなりしかししゆとてすゑつむ花にはまさりて
けんしなどの文の返事をもちと人かましきかありしか
すゑつむはなのしたしき人つくしの大二になりて下
しおりこいてつれてきたるししゆもたつ／＼しき
御ありさまなれはさそふ水あらはとおもひしほとにひめき
みをはうちすてたてまつりきたるにわか御くしのおち
にてかつらをしてもち給へるかいとうつくしくてくしやく
はかりなんありけるをかたみに見よとてこししゆにたひし
なりこれを心へへし

「一〇オ

第十二ゑあはせ
《あ合のたき物にはふふちかきな
すまもあかしもころはへなり》

此まきをゑ合といふ事その比のみかとけんしのふち
つほの御はらにしのひて出き給ひしみやにておはし
ますのちにはれいせんゑんと申このみやは人めにはき
りつほのみかとのとをにあまり給ふみやにてことのほか
にいとをしみにておはしましかは御くらゐにつかせ給ふ
かのしゆしやくいんにはおとなしきみやもおはしまさす

「一〇ウ

とうくうはかりそいとおさなくおはします此御かたの御

よをはけんしよろづをはからゐたてまつり給ふむかし
のあほひの上の・^御ち、さたいしん殿せつしやうをせさせ
給ふ何事も御こゝろのまゝ、にてめてたし御まこのひめ

きみこうきてんにさふらい給ふ又けんしのかよひ
給いしせいせのみやす所の御はらのさいくうにたち給いし
もおりさせ給いてけんし此さいくふを御こにしてうちへ
まいらせ給へはとり／＼のおほえにてむめつほと申のちには
きさきに立たまうみかところの事よりもゑをこのま
せ給へはかた／＼よりあつめ・^てまいらせ給ひ比は三月十日

「一一オ

なれはかたのそらもおもしろき比こうきてんと
むめつほとさうをわかちてゑ合ありみかと御らんあり
せいりやうてんのひろひさしに御さをよういしてうち
の御かたはわたらせ給ふ女こたちの御たいくわんにはねうはふ
を三人つゝ出されたり心こと・^{はさ}にそうそきてさふらはる
ひやうふきやうの宮かんつけの御こなんとゑをはんし給ふ
くち／＼にいとみしにひたりはむめつほなれはけんしの御
かたよりすまあかしのふたつのゑをとり出されたりこ
れによりてひたりかち給ふさてゑ合といふこのす
まあかしの二のゑはけんしすまにおはしまししとき
たとへなきつれ／＼のあまりにいろ／＼のかみにうら
のけしき山のたゝすまいを心のゆく／＼かきすま

「一一ウ

し給へりそれに我か御ありさまをかき給へはいかてかお
ろかならんや此ゑをはわか御物なからあまりにひして
宮こへもちてのほらせ給ふてもむらさきの上にた
にも見せたてまつらせ給はさりしかこのとき
のけうに出されたりこれそむらさきの上のみつの
うらみといふ事ひとつに此人の事なり

「一二オ

第十三松風《まつ風にことひきあかし見る月の》

此まきをまつか風といふ事けんしあかしにて心さし
あさからす入道のむすめのた、ならすなり給ひ
しを御らんしすて、月ひすきてみつになり給ふ

あまり国さかひへた、りおほつかなくこいしくおほし
めしてかのうらゑのほり給へとありしかはあふそらの
すまひまつしはしはむつかしくとてかのあかしの上のは、
にうたうのきたのかたのお、いわたりにしる所もち

「一二ウ

たれはそのあたりの物ともよひくたしてふるきいへなと
しゆりせさせてのほりてすみ給ふとしころのおとこ
をはかのあかしのうらにすて、む・めとつれてみや

こへのほる心のうち思ひやるへし入道はきたのかたむす
めにすてられ又此みとせかほと袖のうへのたまともて
なしかしつきかたしけなくなしみたてまつりし

ひめきみにもはなれたてまつる我身としよりたれは
いつの世にかは又もあひみたてまつるへきとなこり
かなしさとへんかたなしされ共みやこへのほり給へは
めてたくも思もふらんかしさてお、いにゆきつきた

「一三オ

れはかわのわたりなれはなみすこく松かせさひし
くふきはらひてふるさととしも覚すさひしく

あわれなれはあかしをけんしの出給いしおりみや
こよりもたせ給ひしことをあふまてのかたみとて
おき給いしをとり出してひき給ふ

《身をかへてひとりかへりしふるさとに
き、しににたるまつかせそふく》とよみ給いしゆへなりその

ときのことは みやこにかへる かたみのこと まつかせ
お、いにつけへしさてその比けんしかつらにみたうをたて、
月にふた、ひねん仏のためにおはしけりつきにかのお、
いへわたらせ給へは月に二との御ちきりなりあかしに上は

「一三ウ

お、ゐにすみ給ひしなりかつらのつきにけんしのわた
り給ふをみな人かつらにすみ給ふ所へた、りよくく
心へわくへしひめきみみつにてのほり給へはひるこのとし
うらのなこり こと まつ風 月にふたたびのち

きりお、ひかつらに付へし又此まきに・たかりと

いふ事あるへしこれは秋の比けんしかつらへまうて給ひて
れるのことくお、いにおはしけるおりわかつてんしやう
人きんたちあまたこたかかりのつゐてにまいりけ

「一四オ

れはみきなとまいりて月おもしろきあたりなれはあそ
ひ給ふこたかりしてことり共おきのゑたにつけたる
とあるをうるはしきおきとは心へへからすおきの

ゑたなりと心へへしかつらお、いに付へしそのことは
かつらのさと《あかし》お、いかわ こと かたかけて
かわつら おのひと にしきを返す あかし《かのきし》
こたかかり おきな《はのまつ あるし いひのあるしなり》うかい

あまのさへつり ことりかり おきのつと 「一四ウ
第十四うすくも《うすくものかゝるみ山の夕こそ》
《わか身にしむれ花とりのこそ》

此まきをうすくもという事うすくもの女ぬんかく

れさせ給てのちけんしよみ給ふ《いりひさすみねゆた、よふうすくもは》
《ものおもふそての色そまかへる》

この歌のこゝろはか、やく日の宮ときこえしふちつほの宮
その比しゆしやうはけんしのしのひての御はらにまうけ給いし
御事なれ共いんゆめにもしり給はすしてことのほかに御
いとをしみにて・十一にてみをつくしのまきに・御くらいに

つかせ給ふこのうすくもの女いんと申はふちつほの事なりか、
やく日の宮もきこへしけんしのけいほにしのひ給ひし 「一五オ

御ことなりさて御は、か、やく日の宮もちうくふよりねういん
のせんしつかせ給てめてた・し御事也御とし卅七にてかくれ
給ふ比は三月の事なりてんかりやうあんなりみかとはしめ

たてまつりてなけきの色ふかしとりわけんしの心の
うち思ひやるへし大かたのよはかなきをたにも心ふかく

おほしめしなかせ給ふ心なれはましてわすれさせ

給はぬむかしの御心つくしいまはうきよのなこりたに

もなきこゝちして人めには大かたの事にて御こゝろの

うちはおもひやるへしふかくさの山のさくら心あらはとなかめ

給ふゆふくれのそこはかとなく夕つく日のさすに

まかせてみねのくものうすすみなるやうにて我か御

そての色にまかひければよみ給ひしゆへにうす

くものまきという此ねうゐんをもうすくもの女いん

と申つたりされはうすくもとあらは夕くれの袖

の色かゝやくひかりなと付へし又此まきにあめか

したにさとししけく月日のけ色もくものたゝ

すまひまでもふしきなること共ありしほとにお

ほしめしなかせ給いて御いのり共ありしに此 「一六才

ねうゐんの御おちにておはしまししそつとのおふやけ

の御ちそうにてよいにまいり給ひしか人きかぬまに

かのけんしのきみの御こにておはします一たひの事

おやのおんよりもおこることなれはおやしろしめさ

て雨か下おたやかならずと申さたし^(付)るにより

てみかと大きにおとろきおほしめしてその色

をけんしにも申されてたゝ御くらしいにつき給へと

おほせられしかともいかゝることはんへらんと申て

たかゝるに御心の中は心へてよはのちまでもしつか也

しなりその御こゝろのとをりにてこの御よにけんし

三十九の御としふちのうらはのまきにいんかうかふらせ

給ひて六てうのゐんとさてこそ申けれそのことは

心のうら しくれかちなる よしのゝさと こ 《かたこと
ひなあそひ》

「一五ウ

まかり申へいとま申也」つかさ かふり 《ういかふり
なり》はるあきのあ

らそひ 《からにははる
わかつてうにはあき》我身にしむる かみもほとけも

ゆるせかし かつらかわ 《ほたる
かゝりひ》やりみつ

第十五あさかほ

あさかほのさいゐんとてしきふきやうの宮のひめき

みかものいつきのみやにておはしまししかおりゐさせ

給ひてせんさいゐんと申て御わたりありしなり

此さいゐんをけんし御こゝろにかけさせ給ひし也

しかりといへともつゐにあひ給はす心つよくてたゝ

やみ給ひし人也此まきをあさかほとなつくことけん

しの御歌に 《見しおりの露わすられぬあさかほも
花のさかりはすきやしぬらん》

とよみ給ひしゆへなりかのさいゐんかものいつきにて

おはしましゝ時かみのいかきの中までも御心につ

て申かよはせ給へともおりふしのなさけかましき

御かへり事などはにくからすきこえさせ給へともつ

いにこゝろつよくしてやみ給ふおりゐにならせたま

ゐてのちは御おはのとふゑんのみやにいんしよにす

み給ひし也しかれはあさかほにはその又心つよきなと

いふ事を付へしけんしことのほかにせちに申給ひ

しかとも心つよくてのちにはつゐに御くしおろして

あまになり給ふ女はうの心つよくて又やさしき

ためしに申つたへり しなとのかせ 《おふかせ也》ゆめにみなして

かれたる花 ゆきまろはかし 「一八才

第十六おとめ 《ふちにつくふみ むらさきのかみ こすみ とよよふかり
なみたのこいて うすすみ也 とよおかひめわれはかほなり》

此まきをおとめといふことかもりのりんしのまつりをたいり

にてつとめさせ給ふにころは十一月なり二十よりうち

のおんなをそろへててん人のすかたに出したてゝま

いひめとかうしてたいりへまいらすることなるに此事

「一七ウ

「一七オ

をけんしつとめさせ給ふ所に御めのとこのこれみつか
ひめを出したて、まいらせ給ふにしのひてのそき給いて
むかしけんしの若おはしまし、おりまいりしおとめを
しのひおほしめしていまたわすれかたおほしめす人

「一八ウ

ありおほし出しければいまはとしふりぬらん我としふり
ぬとおほしめして御歌に『おとめこかみさひぬらんあまつそて
ふるきよのともよわひへぬれは』
かくよみ給いしゆへなりさておとめといふ也さて此これ
みつかひめはそのまゝ、たいりにとふないしのすけとてさ
ふらはせらるこれそけんしの御こあふひの上の御はらの
若きみのちにはゆふきりのたいしやうときこえし
かこのまきによりとき／＼みなれ給いてあまたの

「一九オ

御こともうみたてまつりし人なり此あいたのことはに
いわくおとめとはかつらの事なれはいかにもしんきの
心をしるへし又此つほねに夕きりのたいしやう十二
にてけんふくありその比よりしておちのない大しんの
御ひめ十四五はかりなりしをうはのおふみやのもとにて
おひたち給ふをおさなき心にふかくこゝろかけてこ
いしのひ給ふほとにひめきみもしつ心なきもろこい也
こゝに・ち、き、つけ給いてあやなくひきのけてひめ
きみをは我が御もとによひとり給ふ此ひめきみこゝろ
くるしくおほしてあるよのねさめにくもひのかりも
わかことやとしのひやかななめ給いしをかの夕

「一九ウ

きりたちきゝていと、おもひまさりしなりつゐに
ふちのうらはのまきにおと、心行てむこにとり
てめてたかりし也そのことはに くもひのかり ね^{さめ}覚
もろこい おさなきほと心のつくし 又此人、のこと
とにろくすくせといふ事はんへり何事そといふ
に此人、ある時いかなるひまにか一所にて物かたりありしを

このくもひのかりのめのとほらたちてゆふきりその比い
またろくいておはしけるに此ひめきみをはとう
くふにまいり給はんとかしつき給ふことなれはなとや
またしきにろくすくせとほらたちしなり返、

「二〇オ

ゆふきりのたいしやうのきたのかたをはくもひのかりと
心へへしその比秋なり又このつほねにけんしのおと、
六てうのきやうこくわたりに四ちやうまちをしめて
とのつくりしてかたへの女はうたちをわたしきこえ
給ふこゝろ／＼このみにわをつくり給ふまつみなみ
にはむらさきの上の御かた春のあけほをしめてはる
のきくさをうへらるさてこそはるの御かたとももの

「二〇ウ

かたりのおもてには申けれ花ちるさと、きこへしは
なつの御かたにてさうひはたんふちつ、しなとをう^うゑられ
たる花ちるさによそへておもしろくむめつほの
ねうこと申は六てうのみやす所の御むすめけんしの
御やしないの御むすめなれはうちより出給ふ御さとの
ため也此女このきみ秋のゆふへをしめ給へは秋
のをうつしてよろつのくさ花こたかきもみち色
をましてことにおもしろしきたおもてには

あかしの御かたかつらにおはしまし、をうつしたて
まつり給ふふゆかれの・山^ののけしきこよふのまつ
のゆきのあしたまことにまとのすたれもあけぬ

「二一オ

へしことにすくおもしろしさるほにかた／＼
とのつくりめてたくしてあかしくらし給ふ所に女こ
の御かたより色あるもみちをはこのふたに入てうへわら
わをつかいにてむらさきの上の御かたへ秋の比の御歌
『こゝろから春まつそのはわかやとの
もみちのかせのつてにてもみよ』との給いおくり給ふされはこのつ
ほねにかせのつてもみちなといふことあるへしそのつきの

る又むらさきの上の御かたよりかの女このあきの御かたへこそ
 のもみちの返しにこれも花をいわねのまつにとりくして
 こそのことくにわらはして御つかいあり御歌に
 「二二ウ

《花その、こてうをさへや下くさの》とおくらせ給ひしかはいとおもし
 《秋まつむしはうとくなくらん

ろき心とも也かやうのこと葉はおとめのまきにある事

なれはくもひのかり又はおとめこなと心へへし也此花も

みちのとのうつりはにわのうへきうゑくさしきの

ありさまとりくにおもしろさふせひなり

第十七たまかつら 《ふなことも かねのみさき まつのうら すへのなきと》
 《あさ花た つくし しみつの御てら

此まきをたまかつらといふことむらさきの上の御かたにた

まかつらのひめきみつくしよりのほり給いしをうこん^{はつ}

せにてまいり合てけんしのおと、に申たりしかはむかい

とりてもてなしかしつき給ふをむらさきの上いかなる

すちの心ねにてかとうたかひ給ひてよみ給ひし歌に

《こいわたる身はそれなからたまかつら
 いかなるすち^もたつねきぬらん》 さて此たまかつらといふはゆふかほの上

はかなくおくれ給いしこととしはふれともはすれ給はす

さまく人を見給ふにもあへなくきえはてし露のよす

かの心にかゝり給ふにかたみにつかへ給ふうこんはかりは

かなしくていかにしてかかのかたり給ひしなてしこを

たつね出したてまつらましとおもひわたり給ふかの 「二二ウ

ひめきみ御としよつにてつくしへめのとにつれられてく

たり給ふさまくそたち給ふほとにかたちもかたちけなく

いづくしくおひたち給ふ程にめのとあわれにいたはしく

もてなしかしつきたてまつるかひなくめのとおとこに

わかeniのちつきぬいふかないなくなくてめのとの

こくみたてまつるほとにならひのくにのしゆこすてにひとり

してむこいりせんとすこれにおそれ給ひてかなしみ給ふ

ほとにめのと二人してとかくかまへてきやうへのほせたて

まつり御とし廿三これをつくしのほりというかの 「二三オ

たいふのしやうけんおいての舟をやたてんすらんとお

そろしく思ひ給ひてはやふねにてのほせたてまつ

りしなりこれをつくしのほりのはや舟とはいふ

なりそのことは はたとせ はや舟 つくしのほりな

と、付へしかくてうこんはつせてらにてまいり

あひてけんしに申てむかへておきたてまつりひけ

くろのきたのかたになり給ふうちのないうのかみ

かけ給へはたまかつらのないうのかみと申なりはつ

せてらへまいり給ふ事はきやうへのほりてしる人なく

ち、おと、にもいまた申さす又けんしのおと、

もしりたまはすうをのくかにあかりとりのすをは

なれたるやうにかなしくてほとけの御しるへをたのみたて

まつりはせへかちにてまいるにうこんもまいり合たりし

なりされはつくしのほりにはせまいりと付へし此ひ

めきみのおさななをるききみという又きぬ

くはりという事いつれのまきにあるそといふ

ことあらは此たまかつらのすへにありしはすの事すへ

にけんしの御かたより御かたくへ正月の御しやうそく

をくはらせ給ふまつむらさきの上にあか色御ひめきみ^{あかしの上のはら}

の御かたへこうはいたまかつらの御かたへくれなひあかし

の御かたへしろききぬ花ちるさとへ花たすゑつむ

はなの御かたへやなきいろうつせみのあまのもとへくち

なし色のきぬ也これをきぬくはりというなり

此まきにあれはとてつくしのほりはや舟はつせ

なにつくへからすきぬくはりのことをいわんに

わたまかつらくれなひの色ふかくなと、いふ事

をはことによりてつくへし此まきならすきぬ 「二四ウ

の色にかとりゆるし色いまやう色など、いふ事
ありけしからぬひと申かとりとはみついろの
す、しなりかちやうのことくなれはかとりといふ
いまやう色とはこうはいをいふゆるしいろとはこう
はいのこきくれないよりはちとうすけれどもゆる
すといふ也ねりぬきはいみしくわしよくの物
なるをゆるすといへり又おちくり色といふ事あり

これ又ひし也これはこきくれないの^{すへのなまき}色也此まき
のことはに ふなこ かねのみさき まつら つくし
^{あさ花た}

「二五オ

ならひはつね

此まきをはつねといふことあかしの上の歌にひめきみ
のむらさきのおんこになりておはしませはみたてま

つることもなくて正月一日にかの御かたへ文まいらせ給へり

その歌に《とし月をまつにひかれてふる人に
けふうくひすのはつねきかせよ》とよみ給ひし

ゆへなりこよふのまつゑあたに此歌をかきてつけて

まいらせ給へはこよふの松うくひすのはつねつけ給ふ

へし又このまきにはかためのもちいか、みの事あり

むらさきのうへにけんしみせたてまつりしなりそのとき

の歌《うすこおりとけぬるいけのか、みには
よにくもりなきかけそなてへり》とよみ給ひしなり

此こ、ろをとり合てはつはるのいわひなれは付へし

わかな《ひけに》す、りのあたり たきのよとみ かさしのわた

ならひこてふ二

このまきをこてうといふことはむかしはいんみやいち
の人きさきなどの事もしきにことくといかめしき

ほうゑありにんわうきやうたいはんにやきやうともいへり

秋このちうくふ六てうのゑんにておこなはせ給ふそのつ

きにむらさきのうへほとけに花をたてまつり給ふとて

ちうくふの御かたへ花たてまいらせ給ふとてわらはを

「二六オ

出た、せてすいひんにさくら山ふきをたて・まいらせ
給ふこてふ花そのへまいりてゐるとありおとめつほねに

はるまつその、御返しはなその、こてうをまつやと

申おくり給いしも此まき^{まき}□^なれはこてふというさて

此ゆめ^{まき}にふなあそひこふねうかへてみかと御心行ていと

おもしろかりし事これ春としるへしあなう

と《さいはらく^{なり}》こ舟あそひ こてふ《花その》山ふきのま^せ□

ならひはたる三 「二六ウ

此まきをはたるといふこと歌に《こみはせて身をのみこかすはたこそ
いふにもまさるおもひなりけれ

このこ、ろはたまかつらのきみをむかへとりたてまつり

てかしつき給ふほとに心にかけて給ふきんたちいとお、

し中にもけんしのおと、ひやうふきやうの宮此き

みをかきりなく心にかけて給いて五月四日の夜し

のひておはしましたるにけんしかのひめきみたち

のかたちのすくれておはしますをみやに見せ

たてまつりとりあつめてきちやうのかたひらにつ、み

てひかりをさとみせてほのかにみせ給いし也かの

「二七オ

かつらのしんわうに心をかけしめてこそ月のひかり

をましかねてはたるを袖につ、みけれといふふるき

ためしによそへたりかのかつらのしんわうときこえし

人はせいかう天わうたいしの御こひわのしやうすそ

かしこれもきりつほのみかたとに大ことかけりひはひき

とありおもしろしこれにはきちやうのすきかけのほ

たる又あやめのしつくほたるのかけにてほのかにみし

なということと心へし五月四日の事^事なり此ま

きのことは《いけ水^{あやめかさねのふみ}
こ・よなれたる

「二七ウ

ならひとこなつ四

このまきをとこなつといふことたまかつらのきみ

のすませ給ふ御かたをはにしのたいといへり此御かたの
にわにはなてしこをからのをも山ゆをもと、のへてう
ゑわたされたりかの雨のよの物かたりにち、おと、此ひ
めきみをなてしことかたり出すゆへ●□□おもしろ
しけんしのおと、をはしめたてまつりわかさんたち
此御かたにてすさましくてあゆのいしふしかもかわより
たてまつりたるを御まへにてと、のへしてまいり給ふ
このちかきかも河ま□□^{かづ}らはにしかはなと、いふ事
あるへしそのおりなつなりいかにもすさましき
ふせいづくへしそのゆへになてしことうんく

「二八オ

ならひにかゝり火五

此まきをかゝり火といふ事けんしたまかつらを御こに
してもてなし給ふといへ共まことの御こならねは
心中にはむかしの御かたみにも見たてまつらはや
とおほしめしいれてなつのよの月おそくいづる比
御まへにかゝりひともして御ことおしへさせ給ひ
ける時の御歌に《^{かゝり火にたちそふこいのけふりこそ}
^{身よりあまれるおもひなりけれ}》

「二八ウ

とよみ給ひしゆへなり御ことをまくらにしてもろ
ともそひふしてよみ給ひし也此心にてかゝり
ひ□□^にことをまくらにして夕やみ こいのけふり
秋のはつかせ おもひ返る たまかつらなといふ

ならひにのわき六

此まきをのわきといふこと八月にはおふかせふきてさは
かしくしよくのついちすきかきむねのかわらなとふ
きちらしてすさましくおそろしかりしなりそうして
あきはかせふく時なるかゆへに秋八月のかせをはのわ
きといふなりけんしの御こ夕きりのたいしやういまた
ちうしやうにておはしまし、比なれはかのくもいの

「二九オ

かりとよみし御いとこのひめきみの御かたへまいり
給いてすゝりかみこいてかのくもいのかりへ文つか
わし給ふそのおりのかみの色むらさきのうす

やうその歌に《^{風さはきむらくもまよふゆふへにも}
^{わする、まなくはすられぬきみ}》のはきと

いうこと此歌の心なりかるかやむらさきのうす

やうすゝりかみなど、いふ事あるへしさてのわき

「二九ウ

のあしたけんししよくへかせのとふらひに出させた

まひしなり中にもあかしの御かたへおはしましておふ

かたのかせのとふらひはかりにてつれなくかへり給ふを御

らんしおくりてなさけなくおほしてことをほのかに

かきならしてあかしの御かたの歌に《^{大かたのおきのはすくる風のおとも}
^{わかみひとつにしむ心ちして}》

とよみ給ひしおもしろき心ね也のわきのあき風

のとふらいおきのはすくるかせなど、心へて付へし

のはきにむらさめふりたりし也しるへしあめとい

いてもくるしかるましきなり 「三〇オ

ならひにみゆき七

此まきをみゆきという事此みゆきはの、み行也

さて御ゆきといふしゆしやうはかのけんししのひの御こ

れいせんゐんにておはしましき比は十二月におふはらのへ

みゆきし給いしなりたかかなれはそのことはに

みゆき おしほ 山 ゆき きし ふるきあと

など、いふ事あるへしけんしのおと、はみゆきの御

ともなしたゝのこりきしをたてまつり給へる也

ならひにふちはかまハ 「三〇ウ

此まきをふちはかまといふ事夕きりの大しやう

のうたにたまかつらのないしのかみのひけくろの御もとへ

もうつり給はてにしのたいにおはしまし、おりよみ

給ふ《^{おなしの、露にやつる、ふちはかま}
^{あわれをかけよかことはかりに}》とよみ給いしゆへ

なりその心はその比のせつしやうくわんはくはけんしのむかしのこしうとあふひの上の御あにそかしかの夕きりにはは、かたのおち此くわんはくの御は、宮はきりつほのみかとの御いもふとけんしには御おは夕きりの御ためにはうはなりたまかつらのひめきみにも御うはそかし此みやかくれさせ給へは申しやうもひめきみもふくとてくろきぬをきせ給へりその比御ふくはてはうちのないしのかみまいり給ふへきにてうちより御つかいにかのちうしやうをたてまつり給ふした心はゆかしくおは・ぬ（紙）にもあらさりければうちおほせ事つかわしはんへるらんといひなしてその、花のいとおもしろきをみすのうちへさし入て此歌をよみて御てをいさ、かひきうこかしたり此心をゑてふちはかまといふ事あり 「三二ウ

「三二オ

このまきをまきはしらといふ事はたまかつらのひめきみうちのなないしのかみかけてひけくろの大しやうのきたのかたになり給ふ我御とのへうつろはせ給ひしかはものうへを出させ給いしにその比十二三になり給ふひめきみおはしけるか出給ふとて此歌をかきてまき・はしらすこしわれたるなかへかうかいのささしておし入て出給いし也 《いまはとてやとかれぬともなれきつるまきはしらよわれをはするな》
とよみ給ひし時のかみの色ひはた色なりさてこそまきはしらといひけれひわたのかみのまきはしらと付へしさて此まきにひとりのはいといふ事ありこれぞ此まきのめいくなるたまかつらへ此ひけくろかよひ給いしにものきたのかたはけんしのおと、のなへてならすおもひたてまつり給ふむらさきの上

「三二オ

にはへつふくの御あねしきふきやうの宮のおふひめきみにてよのおほえおろかならずしてあなつりにくき御事にて御こともあまたおはしければたいしやうもなへてならすおはしける程（ほと）に何となくさやうのかたより御なかもあくかる、さまなるに此たまかつらにかよいそめては又おのこのこ、ろいかならんうつろいはてやすき心もなしきたのかたいのとやかて我か御身のほと心へはてさせ給てもろ共に出立なとしてやり給ひしにれいの物、けのわさにや大なるひとりにひをとりにほひして出なんとほのめき給ふおりさらぬやうにておき出、ひとりをなけさせ給ふほとにはいもたちこほれ御そもやけこほれなんとせし也それよりいと、うとましくなりてつゐにかくはなれ給ふ此ことはにひとりのはい物、けうとむなといふ事付へしきたはふゆなり又此大しうやうをひけくろといふ事いみやう也御ひけくろくおはしましてみさまけんしなとのことくうつくしくはあらさりければ申なりされ共おしなへての人ならずよのしたかひもめやすくしてのちにはくわんはくにてなひしのかみきたのまん所かけていみしくてさかへ給ひし御ことなりさてかしわきのゑもんのかみいまたとうのちうしやうときこへし比たまかつらのないしをわか御いもふともしらすして心をかけ給いてよみ給ふ 《おもふともきみはしらしなわさかへりいわるみつのいろしめへねは》
とよみてたてまつりしなりこのゑもんのかみをはさてこそいはもるちうしやうとも申けれさやうの事いふ人ありともあらかふへからすかしわきのゑもんのかみとたまかつらとはおと、いにておはせしをしらせ給はて

「三二ウ

「三三オ

「三三ウ

いひより給いし也

第十八むめかえ

此まきをむめかへといふ事正月廿日比けんしのおと

「三四オ

との六てうのゐんにてたき物合ありこれはあかしの

はらの御むすめとうくふにまいり給ふ御出立の比かともを

御かたへへくはりていとみあわせ給ふせんさいゐんと申

わかあさかほのさいゐんけんしには心つよくてやみ

給いし人なり此御かたよりちりすきたりしむめ

かえに文を付てこうりのつほにたき物をおさ

めてこよふのゑたのゑにはんへりつ、又おもしろき

つほにもたき物を入れてさくらかへに付られいひつけ

たるいとさまならひなくゑならずおもしろくしな

「三四ウ

されなりその歌に《花のかは葉もあまたにとまらねと
うづらんそてにあさくしまはや》

たきものといふ事あらはこよふのまつにつけられし

文など、いふへし又ちりすきたりしむめかへにいひ

つきたりいとるりのつほなとあるへしやかてそのよかの

ほたるのひやうふきやうのみやはんしやにてからのたき

ものを心みさせ給ふたき物色、むめの花くろほふを

はむらさきの上あわせ給ふはなちるさとししゆけんし

いろくさまくに出させ給ふたき物いづれもとくくしに

おもしろき中にもむめの花はその比のおりにあひ 「三五オ

ておもしろしとさためられけりみきなとまいりて

宮かへり給ふ御おくりものにたき物をたてまつり給へは

みや御歌に《花のかをゑならぬそてにつ、みもて
ことあやまりといもやとかめん》御返事

けんし御くるまにたてまつり給ふ

《めつらしとふるさと人もまちそみむ
花のにしきをきてかへれきみ》むめかへたき物など

いふ事に此歌の事付へし又たき物にも、あ

ゆみといふ事ありこれはとをくまてにほふ心ね也た

きものなにてはなし又たき物をみかわみつにうつむ

事ありそのゆへはたきものを合てはなつふゆにかわり

てうつむ事ありくわしくはむめかへのつほねにあかせ

りむめたき物はたえむめはななれはむめかへといふ

第十九ふちのうらは

此まきをふちのうらはといふことくもひのかりのひめき

みをゆふきりの大しやうみそめ給いしむかしより

思ひそめてとしをふるにひめきみのち、おと、ゆるし

給はさりしかともさてもあるへき事ならねは

ゆるし給はん心にておと、の御いへにふちのさかり

にちうしやうをよひきこえ給ふけんし御あそひなど

ありてさかつきのつゐてにおと、ふちのうら葉の

事をゑいし給いし也此歌ほんかに《あさひさすふちのうらはのうらとけて
きみしおもは、われもたのまん》

といふうたの心也まことに思ひ給は、むこにとりなんの心

なれはさはいなくむこにとりてみつももるましく

めてたしのちには三てうの上と申せしはくもい

のかりの御ことなりあまたの御ことも出き給ふ比は

四月なりさてやかておなし月にあかしのうへのひ

めきみとうくふにまいり給いて御つほねむかしのみきり

つほ也御とし十二むかしのかういの御つほねなれは

けんしの御さうそくなりしけいしやと申き御お

ほへいかにおろかならんやあまたのみやたちの御は

は一のみやはとうくふにたち給ふあかしのちうくふ

とは此御事也かくてそのとしけんしのおと、御と

し三十九にて大しやう天わうのせんしをかう

ふりて六てうのいんと申けりくらしいをきはめ給ふ

御事なれはさしあたりてめつらかにめてたしやかて

そのあき六てうのいんへみゆきなしたてまつり給ふ

「三五ウ

「三六オ

「三六ウ

御このゆふきりその比さいしやうなりしをちうなこん

「三七オ

になさりいつくまでもふちのうらはのまきはけんし
の心行てよろこひ給いたるまきなり又みゆ

きのおりおもしろかりしはその比のいんと申は

御あにしゆしやくいんにておはしますしゆしやうわ
人こそしらねとも六てうのいんの御これいせんいん
にておはしますこさはなんいんにてあるへきをけん
しなをひけし給いて大しやう大しんのこさ

にせられたりしをしゆしやくいん御らんしてい

かゝとあるしの御さをなをさせ給ていんの御さ

とひとしくせさせ給へりかやうの事心へへし

「三七ウ

（以下空白）

「三八オ